

山口又市郎著

開化自慢 初篇 全

117



一本

一册

091608-000-5

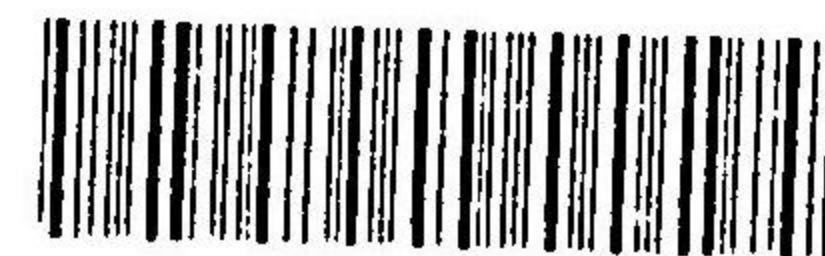
特41-117

開化自慢 初編

山口 又市郎 / 著

M7

DBO-0054





園仁自煥初編序

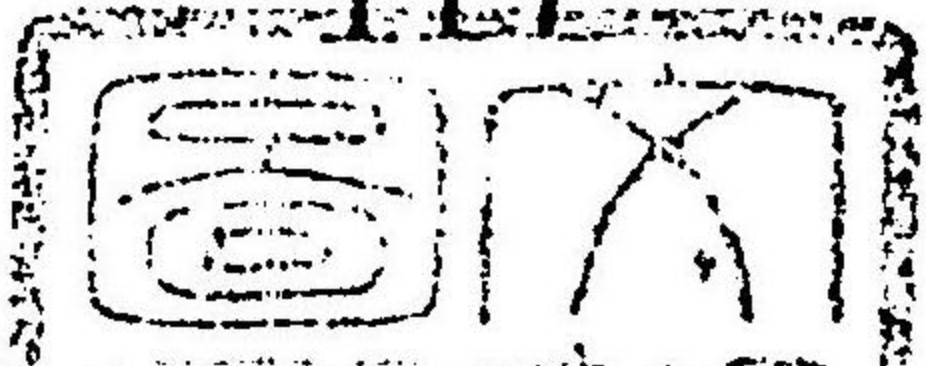
陽和をたて百霊を并まじるを心をもつて吸管  
とひま吸つて吸管をたてて氣管をたてて  
鏡をきこる園を氣管をたてて氣管をたてて  
ひまといひの氣管の作らるる一は氣管の結  
しよして神体のまじりて天のいふは  
初編序の園仁自煥初編序

昇化  
自煥

初編



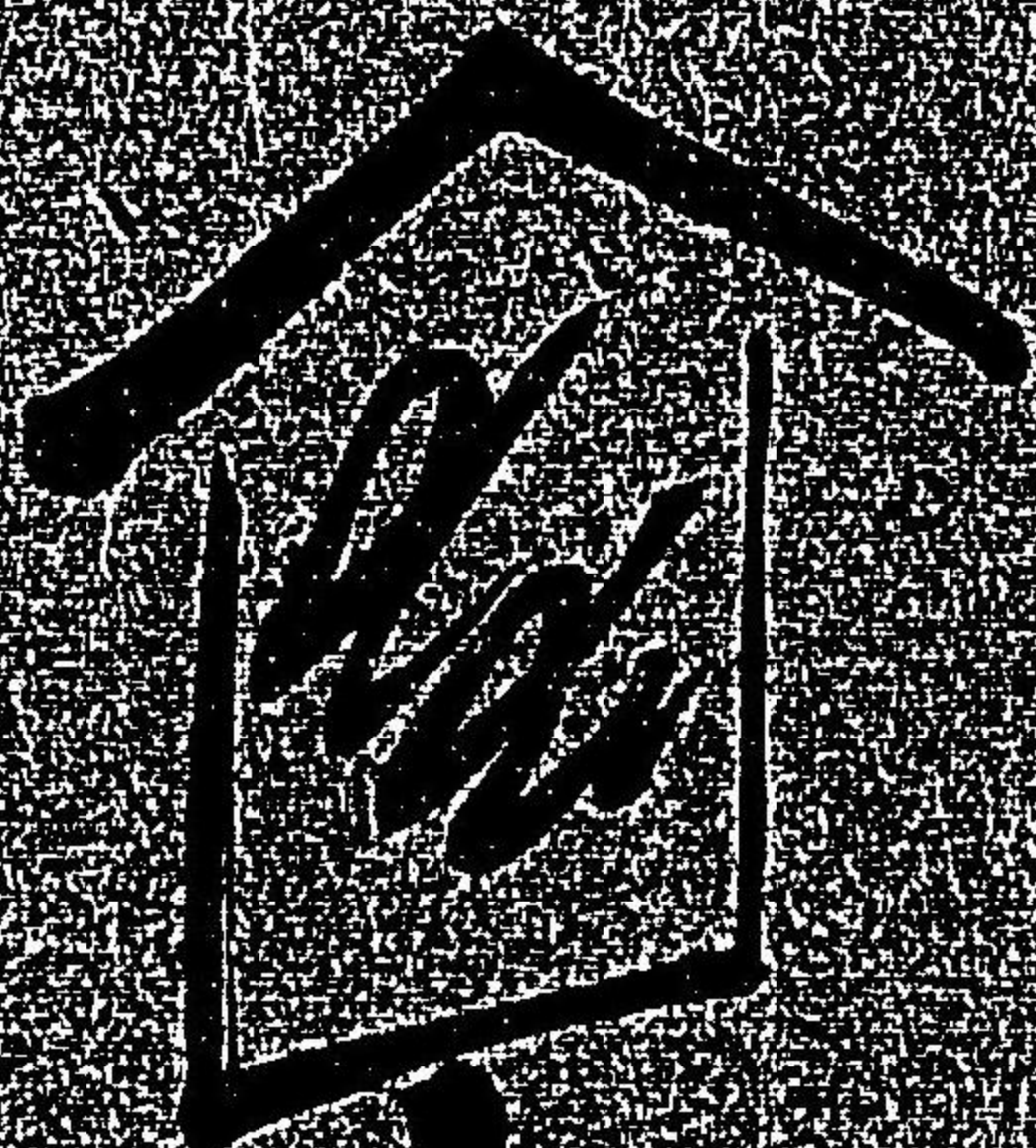




園のり他の自ら煙ま初はじ海うみ序のり

陽ひかり知しるたと百ひゃく意い平へいままるるままららんんてて吸す管くわん  
ととひひまま吸すつつてて知しるままららんんてて吸す管くわん初はじ海うみ序のり  
鏡かがみままららんんてて吸す管くわん初はじ海うみ序のり  
ひひままららんんてて吸す管くわん初はじ海うみ序のり  
ししままららんんてて吸す管くわん初はじ海うみ序のり  
初はじ海うみ序のり園のり水みづ鏡かがみままららんんてて吸す管くわん初はじ海うみ序のり

年とし後ご







刀工 田中忠治



三浦徳之助画











のふとらうとらう素れふ肥田薬を帝と祀せしむ実  
 みこととらうと素れきくうらうとらう西洋病と云  
 えて眼の象の目のごとく鼻を禱するなりはらアラ  
 ビヤるふ薬とをめて儲蓄せむと云うとらう  
 ふ白泡と喰ひやまじりくと云て居る也  
 社中と云ては人々の友とありむるとらう  
 やりつゝ西村純で刺殺のやうなつらつき中

ふが一人おらきら又十餘の老人を名と持た  
 とらう今橋田の大家の隠居時代を機のあるま  
 信ふ金平糖のやうなちひさい奴とすんぢうぢせ  
 ちて思存紗の羽織菓菓子の中にあるの葉靴  
 あはぬおお座せり次あるらゑまじり又とらふ  
 書生養蠶給の布子ふ白の布と帯とらうらて  
 結び思きんごもぬらうとらうとらうとらう



目ららしむ押つゝ切きさうふ年般羽織繕く手  
 の女房もあき獨身のものある。つゝ次あるの花車  
 志度といふ醫者業紙のやうふ者八丈の古小  
 袖時代ものと珍愛せうらゝ悪羽織澤原かあま  
 りみあ浮浪も二三藩でお業の執ほど後のふり  
 まてアミえさくやうふ大さきんせ織業あませう  
 ぐ入らざで船かゝ一藩中一藩の酒びりり。とらゝ

人のさうとらふ病ありて痛の病氣と頭痛よ病む  
 二り疎の病きれたの玉指醫者の不書生ある。つゝ次  
 あるの彌義軒四郎とらゝ暗うらゝ出らゝやうふ  
 悪仕立のツボニマンテルの。とらゝとあまらるるが  
 病で肉の車とらゝとらゝとらゝとらゝとらゝとらゝとらゝ  
 鼻づゝと通されては連中のおさねののみつらと  
 るらゝあらゝ。今一人らゝ江戸屋世良若禱とらゝせら















拾ちつてもあつては、やまを「これくま」といふれ  
 ても忍痛く。まのー「奥庭」でも「清水」のあつり  
 て。温泉と見えぬ。ト「うら」あつても「大さう」換と  
 うけと「やアぬ」う「それ」やふよつてあ「ち」さ  
 云「い」ぬ「い」す。まのー「あま」り「まあ」ー「考」の「あ」こと  
 て。おま「の」ろ「う」かり「下」ま「け」が「ち」う「フ」ワ  
 それら「の」指「考」が「す」その「さ」ぬ「さ」清水「あ」ら

湯「が」有「て」不「動」が「ま」つ「く」あ「る」ふ「よ」つ「て」不「動」が  
 あ「ま」バ「あ」せ「温」泉「が」あ「る」の「ハ」テ「ま」あ「ま」あ「び」る  
 温「泉」そ「う」と「り」ふ「ら」の「ま」あ「ま」や「ま」り「あ」ら  
 う「く」ぬ「く」ま「う」ー「ぬ」と「が」ら「で」あ「ひ」付「く」の「こ」ら  
 ら「大」山「不」動「も」縁「の」ぬ「く」ま「う」ー「ま」あ「ま」ー「サ」ア「ま」  
 ー「や」ふ「よ」つ「て」も「そ」う「と」や「つ」く「ま」あ「ま」あ「る」ま  
 い「の」で「ま」あ「ら」う「ま」あ「ま」あ「ま」あ「ま」あ「ま」あ「ま」あ「ま」

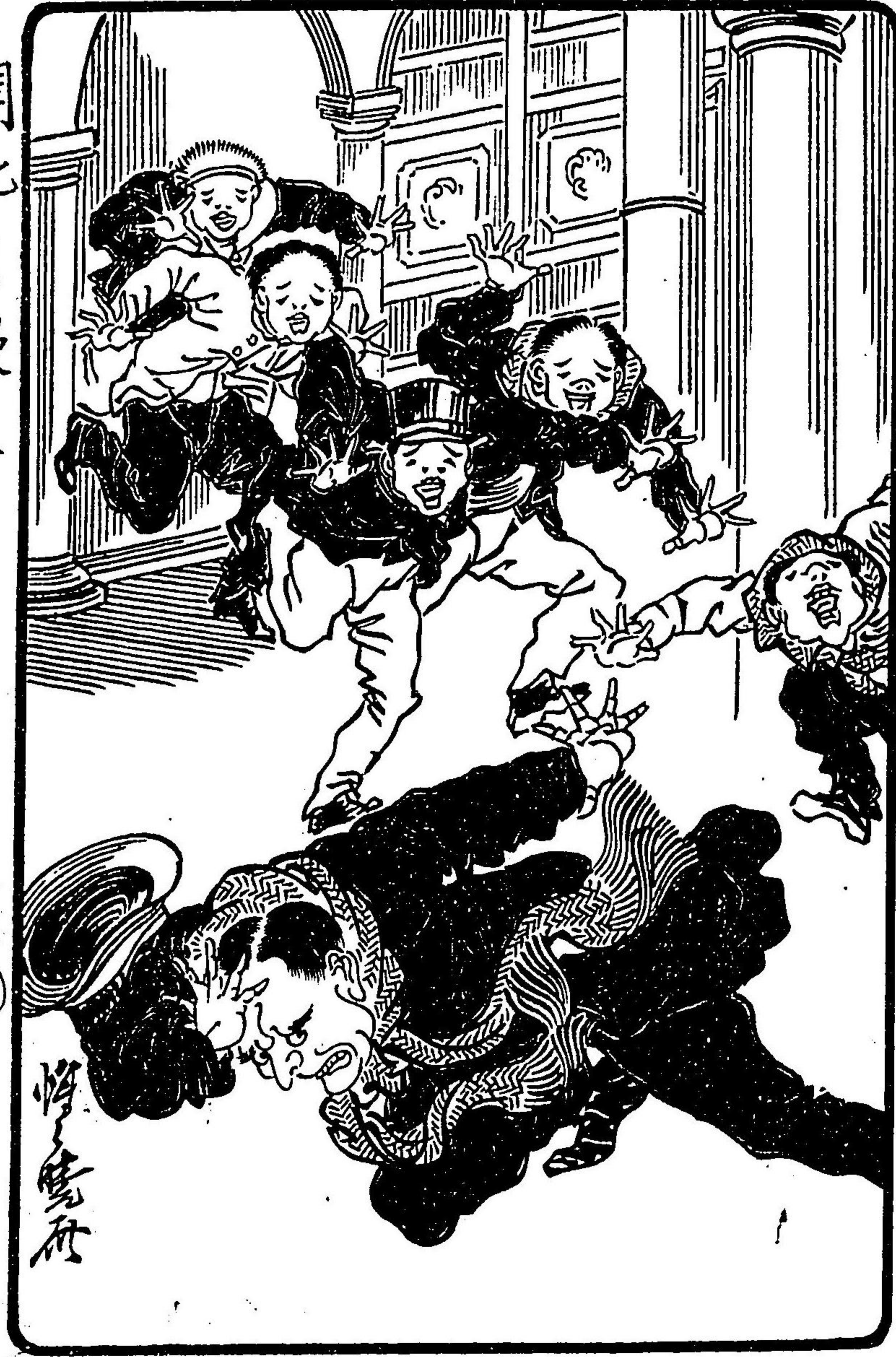


イヤクをやく見切つとぐまーてムラウト。くらふら  
 昇さー出て一丸は連中の名ひつくゆふ今まで  
 とんとあつてさるがあいは先業のちがめふ志  
 庵さんの免の目強えとんとちよこもあー控  
 良若さんのあ浮目鏡もたがいくらもあきて八方  
 眼鏡とめさふよつて味い沈黙人又とる道写  
 んまうけるあしちゆのせと。りふよおれ若者一オット

まらあ〜共振ふ人のとまうりりふぐ丸は連  
 中の仕換じの大物とつら〜おめ〜ごろう者  
 ふ〜とあるまのちう何程免がちやるか〜とい  
 つ〜大坂中の豆腐屋へ金金と〜て豆腐のかを  
 と買ひ込め横堀の巻と借りて借おんごら〜と  
 てまがうねやうりのら〜とよ〜皆お磨ら〜て横  
 堀へ捨〜とつて裁おあう〜若紙で吸おされ



開七首變



博覽所



開仁德樓

九



の甲摺こうすりてあやまあやまりころころくくは積とく罪ざい重じゆうと出でさせられ  
 こでまこああららううトトりりああままうう口くち弁べん志しととしてして「そのややうう  
 みおみままののややううおおののききここままよよままててととぬぬららててぬぬめめ  
 りりどどややああままのの一いつ俵ひょうととりりふふおおとと指さし丸まる押おしととめめ「これ  
こままののまままままま能よううげげんん又また志しああままれれええううささううふふ  
 りりふふののままままのの人ひとはは麻あじじややままああ勢せい森もり一いつままれれ  
 一いつ俵ひょうおおままいいごごののははああつつまま何なにももああままるるののじじややととお

りりええししややるる。性よいい形しん工く変へんとと意い明めいささううとといいふふてて来く  
 るるののででままままぬぬりり互あふふ人ひとのの裁あ度どままううりりひひあ  
 りりてて居いててもも果はががちちののまま指さしまま編あみみののややめめててりりつつまま  
 もも名めい報ほう向きやうとと考えんごごりりくくトトりりまま一いつ回かい笑わらひひととあ  
 りり我わちち「ある程ほど是これハハ西ご丸まるササ雅あとと名めい報ほう向きやうハハまま  
 ぬぬりり「あハハツツトトああるるくくととののひひささううががゆゆぶぶががくく音ね  
 るるでで後あががダダブブくくししててああるる故ゆににおおののまままま「あハハツツトトああるる



のわづらぬらふある。おとうさんどもいやくらちや  
 まさおまゐてぞらくあみあげてるのと。志  
 つと幸絶して病るはつらさ。あう一病でも治る  
 りてはよみあのをはだて出るのが世帯の通例  
 せぬあせの出てままりぬうちひくへてあひ  
 あうぬさサハハあんまりひく業もままり  
 があるすくまき死んでましまひません

こやうくおまごが越向があるといぬ  
 くひあさしお隠居さんよさうらなれて  
 りやくまき出さるるめ私のお越向といふ  
 らのくみ皆さんのあふくつつて道橋を通り  
 うつらのおひつきははきおて大塩平八郎  
 どの和泉大の神の橋田経勤のとらふ  
 とおとあししお越向で人なとらひ



大入とかけて金も大層まうりるといふゆゑ  
 有もひとりあつていふを仕組んで連中が金も  
 ふあつて一ツ芝居で一ツ友もまうけやうといふこ  
 丈とそつちをめぐらして生報向を其時その  
 越向の忠居義といふ外郎で十一股づきふやる  
 つゆり「そふんのころと何てお居義が新報向  
 サアとまが報向でころちの報向の万石忠居義

とやるのにおままりの大層増改め驚うちの際  
 るりぞ「嘉者何りといふも食せされをその  
 味ひとまらばと國治まつてよれ武士の忠も  
 武勇もかえるよたとへば星の登ええは夜に  
 礼きて敬るためととふ候必書のとふ  
 文句とグットもぢつて「報向ありといふと金  
 五あられはまうけもあらざといふ國を



まつて貿易のかまもさうらんおひらくるお。  
 たとへる遠も今の栄化お改まる時勢  
 とまらふ仮名書の。とうとうおして大老被のキツ  
 カケて足利重義公ゲール社の足あみ酒練てピツピキ  
 ロイのピイテレツクテシのテシで出て来るかほよ  
 沼あが結唐の大袴で境改とらふとらうがシヤッ  
 フ改め「尾羅紗帽子丸おらう」申お帽

子卑おらう「は祝儀帽子はまくの安位  
 官位およるぞか」あるひの祝儀ラツツ帽  
 子玉子おらう「は支那の風甚入この好も  
 て数々多きこそ申お」とらふ句で茶麴のかほ  
 りとらふおとシヤボンのうらう師煮うあ洋紙お換え  
 字のつけあチヨツキのうらうからおしてうらよの猿へ  
 うらよとらふ遠向二股目の松切りであくて楢の下



うゝ這ひ安を敵さつゝのまゝて賑切り三役目。こ  
 あまゝいふきまぐらうとひふあどひあづふ多きう  
 うへふ熱の皮裁刺ふあらぬ利ともめんとめん。ちや  
 ちと勢あづつけの寄け強ふせんさくことハムト。師  
 直ぐ心算をうて別安返けうとハ存ウハ立存じま  
 せぬハヤあぞんどてあらふ。アキ度身代ハえくひ  
 身代てらもちうらと出あるうちやるみひる代前がふ

六人むろぞうげぢくくのやうな供ごうがあめく  
 の入屋きもやうふのうらくとしてらうく古  
 又や古帳の金を本と通テあて二十又今年ス  
 十今年の公債代出とあつてうゝめまご目がさ  
 めぬ四智でたま〜密化の人とるると山師  
 の山氣が多いのと是けあのあてあきりある程  
 おもあもえ〜ひ身代ま度の中うあふまざらう



へたり付て時勢の變化も知らぬものや。因循旧  
 習とつひまを待つておろまやまりの因循が僕  
 う二十里う三十里の國のうらちを。天も地もあいや  
 うふあふてふゆはまといふるにがあらぬ。とあらぬに  
 維新の風布告てや。俗の爲ふ社中でもむまむを  
 があるまゝうとあふて大教會へ出くえると何が  
 國ふらうり居る奴やあうらて作てして度とじ

あひあちちの瓦形體へ突きあつてを鼻づつと  
 ぱりらあちちの橋柱へあつぬとぶつつけて  
 びろとピリくくくと目と鼻とてまきい弁ス  
 横も丁度その仲言とつふ喧嘩場のせりあて  
 皮がサーベルと接て切うけると師生の憎み  
 落るおろおろおろおろと健内と勤平との出合  
 雨の響坂健内今ハ響より豚鬮う半のきんやき





愕然行



持旗







りおもだろふ やま くれさく ませ けい ま せん  
 おきり これ ぐ よふ 振向 ま ぐ ま きて ま ぬ ま 序 ま が ま せ ま や ま ぶ ま の ま か  
 げ ま へ ま へ ま る ま と ま 推 ま の ま 実 ま 玉 ま て ま ツ ま ド ま ン ま 御 ま 平 ま ぐ ま せ ま 也 ま ぬ  
 の ま 穢 ま 筒 ま を ま お ま け ま 摺 ま 付 ま 本 ま の ま あ ま へ ま へ ま て ま せ ま ぐ ま り ま よ ま り ま 虎  
 あ ま ち ま あ ま へ ま て ま こ ま ろ ま や ま 乞 ま 強 ま 人 ま 兼 ま や ま あ ま る ま と ま 懐 ま 中 ま せ ま ぬ  
 ぐ ま へ ま せ ま 又 ま 十 ま 拜 ま 虎 ま よ ま り ま 先 ま 一 ま さん ま ふ ま ぬ ま る ま 森 ま 跡 ま の  
 六 ま 辰 ま 目 ま と ま り ま ぬ ま ぐ ま ぐ ま あ ま ん ま ま ま り ま 志 ま や ま づ ま づ ま づ ま 長 ま ぐ ま き

れる ま ち ま よ ま う ま と ま 一 ま 鳥 ま づ ま ぎ ま せ ま へ ま へ ま た ま ぬ ま ぞ ま 兼 ま と ま 一 ま 鳥 ま の  
 お ま け ま 来 ま て ま ろ ま ぬ ま ぬ

五祀り燈初彌上り



山又二郎著  
開仁自傳初編下

大阪 山口又市郎著

江戸の<sup>えど</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>  
 江戸の<sup>えど</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>が<sup>が</sup>出<sup>で</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ご<sup>ご</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>長<sup>ちやう</sup>物<sup>ぶつ</sup>種<sup>しゆ</sup>  
 も<sup>も</sup>芝<sup>しば</sup>居<sup>い</sup>母<sup>ぼ</sup>の<sup>の</sup>持<sup>もち</sup>丸<sup>まる</sup>隠<sup>いん</sup>指<sup>さし</sup>が<sup>が</sup>掌<sup>てのひら</sup>よ<sup>よ</sup>入<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>笑<sup>わら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 入り<sup>い</sup>「<sup>これ</sup>是<sup>ま</sup>の<sup>ち</sup>中<sup>ちゆう</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>形<sup>かたち</sup>又<sup>また</sup>ど<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>。シ<sup>そ</sup>テ<sup>て</sup>其<sup>その</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>笑<sup>わら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 た<sup>た</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>る<sup>る</sup>ふ<sup>ふ</sup>芝<sup>しば</sup>居<sup>い</sup>の<sup>の</sup>田<sup>でん</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>ー<sup>ー</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>笑<sup>わら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 武<sup>ぶ</sup>老<sup>らう</sup>さん<sup>さん</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>う<sup>う</sup>が<sup>が</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>へ<sup>へ</sup>の<sup>の</sup>形<sup>かたち</sup>又<sup>また</sup>ど<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>親<sup>おやぢ</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>の</sup>小<sup>こ</sup>云<sup>ぐん</sup>と<sup>と</sup>笑<sup>わら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

開仁自傳上

十九



とおもつて。我慢して。笑や志よふり。さやうく  
 人もあきらめの。行まど。まごう。モシ。思慮さん。志び  
 きの業。お持合せ。うりません。う。一。み。ね  
 むけの。醒る。業。うん。せ。お。ね。あ。や。み。く。持合  
 せ。う。り。ま。せ。ん。が。私。が。先。刻。う。う。ま。よ。ざ。ら。う。ま。い  
 の。で。鼻。く。そ。と。丸。め。て。お。ね。お。七。八。粒。ぬ。業。が。出。来  
 ま。う。と。う。お。ね。お。ど。ふ。で。う。り。弁。こ。れ。さ。く。マ

あつうふーて。笑。あ。され。り。ふ。お。ね。良。吉。づ。お。業  
 て。東。西。と。う。ざ。ら。エ。ン。と。あ。て。お。ね。め。づ。う。け。首。の。は  
 布。告。で。お。う。る。も。身。賣。の。な。う。む。お。ね。長。さん。へ。届。け  
 と。して。後。置。所。で。う。い。り。せ。ぎ。金。の。貸。借。の。體。文  
 あ。て。紙。と。張。て。又。十。条。バ。ン。ク。の。横。お。あ。う。い  
 れ。も。田。舎。の。人。が。見。あ。き。ぬ。ゆ。え。是。て。お。通。用。志。ま  
 き。う。と。め。づ。う。さ。う。み。ん。る。あ。う。う。り。お。滑。稽。は

開什自慶下

開什自慶下



彌生あづきの侍さむらいとりふ知しるが深ふかきヤツやつの侍さむらい平へいの  
 せり娘むすめが娘むすめお孫おまご又また孫まご友とも小こ目めふりくり別わかれて  
 胸むねもくくまききき殺ころすを虎こふ出で合あえおめ筒づよて  
 赤あかぬりけあてさぐりまねもとりふ又また句くつづきで。  
 ヤア松まつ果みあぶらも穰はららり、神かみ華な武ぶで送おくつてくれ  
 とりふのちやうと穿うらへおとさまで七しち段だん目めが手てのあ  
 るあうとりふのが古ふるき空そらのん切き布ふ一ひと力ちから屋やの産うま  
 る

と借かと撞つ撞つでむきううみそとあておる中なか良ら之の  
 助すけが正ただれの符ふ状じょう付つけと那な織おりの紐ひもへむきんて矢やる子こ  
 騎が又またきめて買かうせる舞ま臺たいが及およまつく力ちから孫まごが言いな  
 で龜かめで來きて郵ゆう便べんて雇とりて教うかよのあそ後ごをぬき  
 矢やが入いりきつと撞つ撞つととりふ知しるが半はんの志しやく鐘かね  
 サーベルさーべぬき矢やが人ひと力ちからな車くるまぬけ空そら良らの助すけが面めん  
 浮う封ふう筒づつの封ふうと切きつて釣つりランプのありりてふみ



ところ。二階でもおるが、写真屋をつれて来て。そ  
 のぬと写真ふとる。標の下で、われをまが、眼鏡  
 で、ぼろ、おから、学校の、を、被、が、ドン、二階の時  
 斗、が、チン、く、ト、鳴、る、の、で、二階と、見、上、る、と、  
 ん、う、お、程、う、そ、り、ま、ま、お、お、い、て、お、る、  
 お、ま、の、役、お、あ、て、お、ん、ま、り、我、身、が、お、り、  
 や、ら、の、仲、お、入、横、又、字、よ、ん、で、お、る、  
 ナ、ア、コ、ウ、を、て

ナ、横、又、字、よ、ん、で、お、る、の、  
 た、い、り、あ、る、の、お、お、の、天、地、川、や、星、の、痛、い、  
 も、お、つ、お、る、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 を、お、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 一、つ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 ま、ら、地、球、又、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 き、や、ん、よ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 中、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 シ、タ、ガ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
 下、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、



止つては船の燃費でたまるまいと、幸ひさふ  
 愛除程とれとつてあつても「げやうさふ  
 ぐりおあいのめとよやら是のあぶなふて「引大  
 ぶあいく。あぶなを怖ひのむかゝるの今、海で  
 半時十里「出の鐘は是れ又船又さう「や  
 くのナ「船で「燃費の「ぐりぐり「と「ん「ん「  
 きのぞかん「まゝ「東京の「まゝと入る「帆柱までと

だで升る「や「でん「ぐう「さ「あ「や「ん「まゝとありぬぞ  
 へ「あり「ざ「下「して「や「ろ「あ「ぞ「と「り「ふ「せ「り「ふ「お「ハ  
 後目の「及「好「川「あ「人「足「が「み「後「ふ「あ「つ「こ「ぬ  
 三「智「翁「人「足「が「人「力「車「の「多「く「な「ら「つ「と「ど「ぶ「つ「く  
 り「ふ「ふ「白「の「仕「立「で「だ「う「け「の「子「踊「の「後「め「を「言「ひ「ら  
 かん「が「み「あ「ら「が「い「お「石「の「せ「り「ふ「り「是「を「あ「ひ「む「よ  
 らぬ「作「お「忍「う「史「中「良「の「舟「の「日「候「目「じ「や「と「て「括

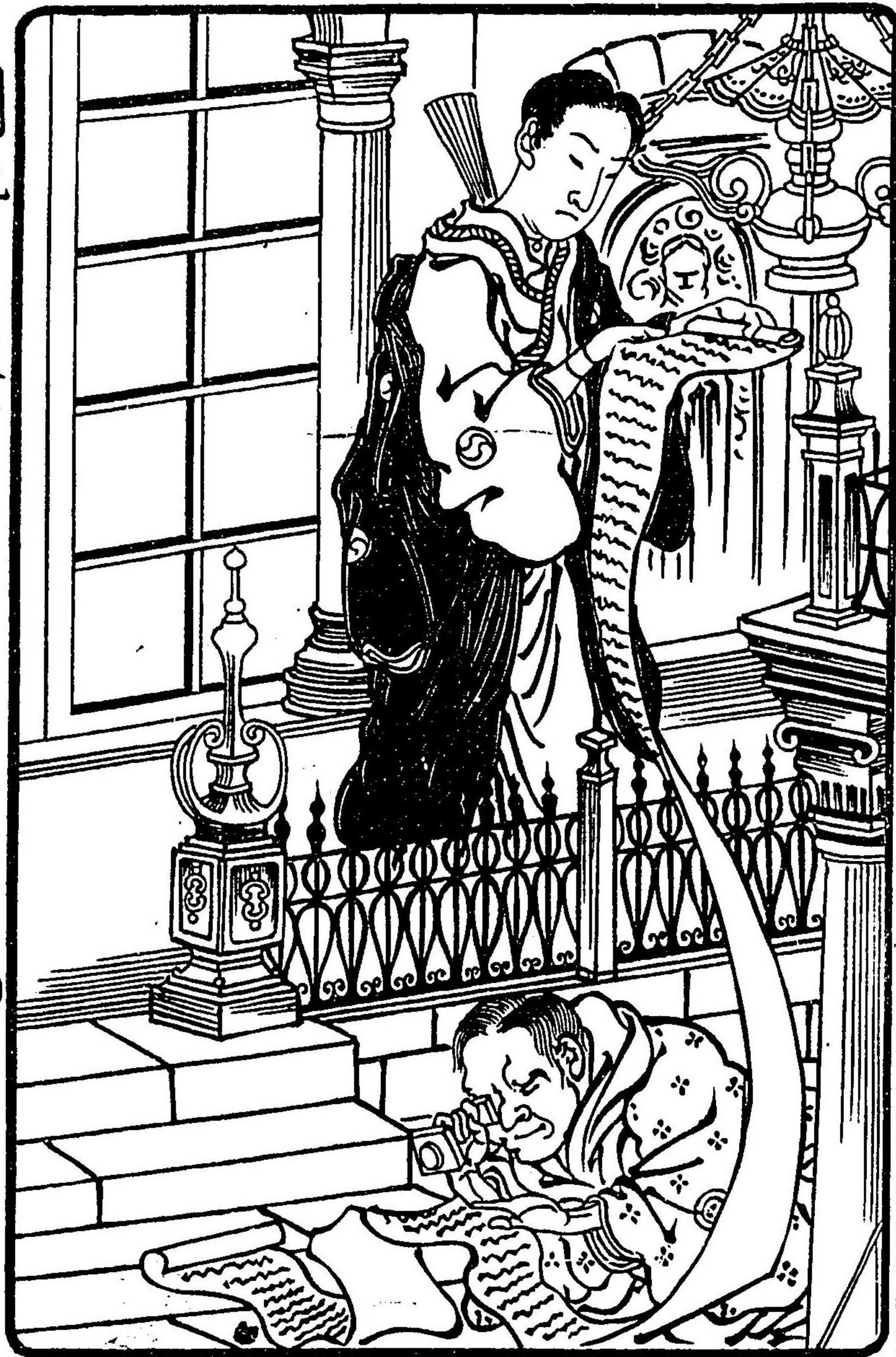


歩去あぐらゆめ一宿よどりまゝしては因ふりや  
 さうあういお目論見のり子方此尤も存する  
 約乞中と時の往後又貸金も此度りまゝに  
 許指の此趣向ふのりまゝやう然らぬふと  
 いひ約定はくし〜これともお今の町人ひつづ  
 うひまても減らる程でいうふ約乞すれはとて大  
 さうお目論見機械の絶せよ中まを蒸る船

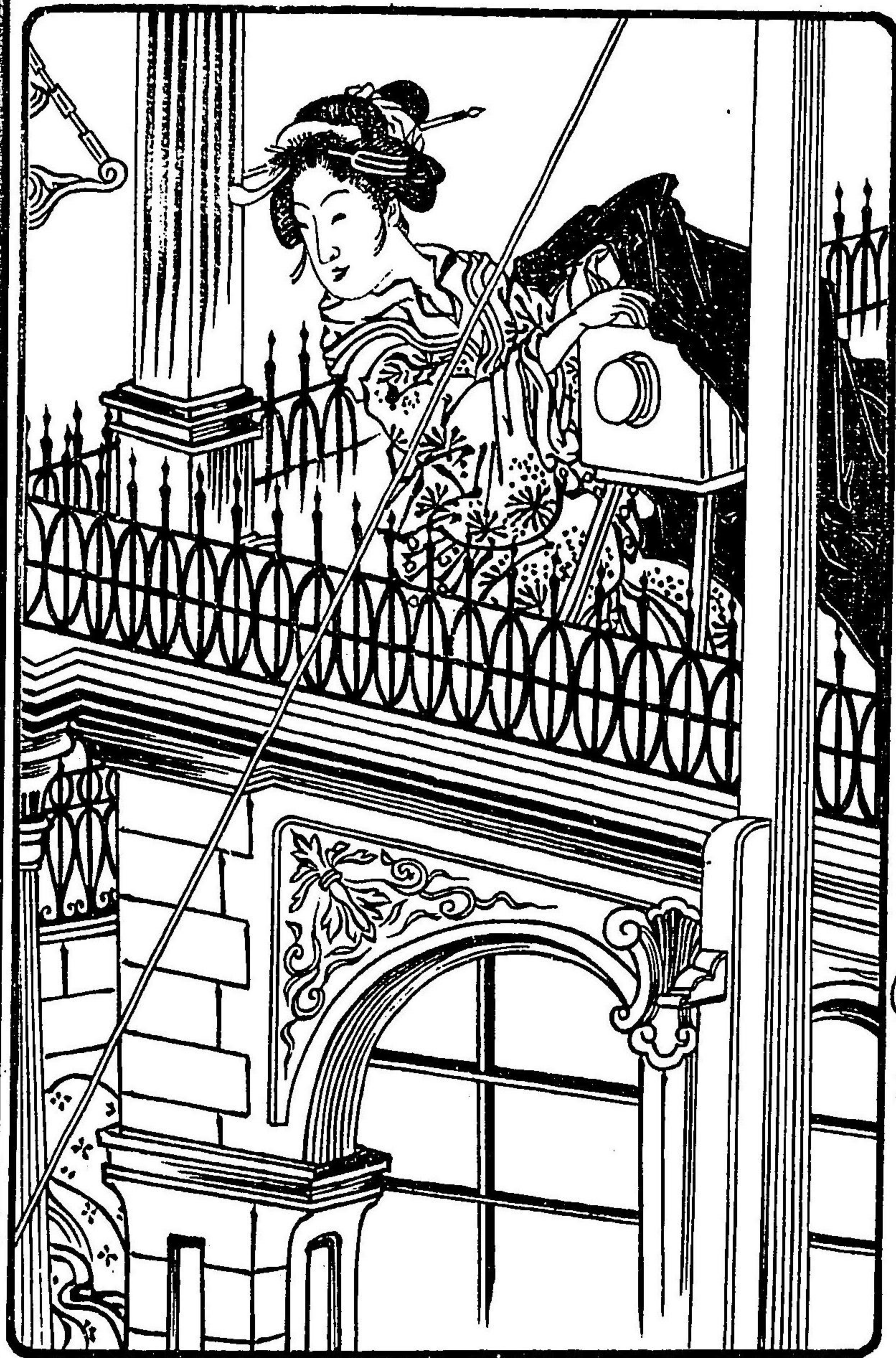
よ此前退つあぬも破談のりとハテ約乞出せぬ  
 うり〜ことやまごいな〜誰ふまと外へはを  
 意あふはお談あされませとサヤさうでり  
 ままようト笑てハツとちおひなぐらうアまあお  
 石さまの作ああと〜いうふ卑下あされうとて  
 翁と中長と女横男上げつりあちぬとナそんな  
 むやまあうら〜お前の住指はを後ゆゑ今後極つ



開光道場



開光道場





て出替の地券も僅りぬ百あまりありしにせり合文  
 句よほどふこしくして本務の出とある虚言  
 借の出うちも周縮らしいらる。よト何ふはし  
 能ろふりや本務の出とありあどろよかろふり。そ  
 ちでお石の立合をこくが海で中島の女の出  
 てある如のせりふぐ一月以来めづるしい強向  
 るまいら本務は改正の以福が居き本務又旨

も目がめきりつゝ叔父さまあるでらるト修  
 へまきこも大里が羽ふ本務目とむき出  
 年の換毛ぬりつゝんと能わどのあしうひ用  
 ぶふらも本務まあ金子の都合は掛ひつるう  
 思ひのき屋の掛り引が本務が身のは合せ  
 教習仲と漕の出来紀前平戸の海中よておと末  
 号名の温まふあひひの外の換毛を済まして



せ。まづううくとの誰又も速招大坂へ移の  
 かせ貴崎でまねふと思ひ込んぐる物等申つら  
 ておつらぬ金まの融を少身おふ金金のふ當め  
 薄いと米倉おで死うさきんとおめつらぬ社  
 中みおえくせき不お當の金銀うりぬ持家  
 て一月切りのま付もまうりうけとせしめ  
 ん為買米多くおまうりう幸つと暮るおふ切りふ

りまにぬきお場おつちのふ記さうりと急げ風  
 が交て社内中の換とすうとい判その時まぞと  
 りふせうふできうく初い大概みして早急申  
 の脚が約色遠愛もる候もあ浮安店の大屋が  
 故とりふさ味で座をとりて見せ申さんと云  
 て奥の間のふさぬとあけると大ききお頼ふ大屋  
 親子が写去西洋切の紙の強本着さていと思ふ



俸<sup>ら</sup>て<sup>ら</sup>門<sup>かど</sup>出<sup>で</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>お<sup>の</sup>む<sup>け</sup>を<sup>し</sup>上<sup>へ</sup>と<sup>ら</sup>懐<sup>な</sup>中<sup>ちゆう</sup>う<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>を<sup>し</sup>  
 強<sup>ちゆう</sup>力<sup>りき</sup>強<sup>ちゆう</sup>て<sup>ら</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>  
 我<sup>わ</sup>は<sup>ら</sup>す<sup>ら</sup>ぬ<sup>ら</sup>西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>の<sup>ら</sup>航<sup>かう</sup>海<sup>かい</sup>測<sup>そく</sup>量<sup>りやう</sup>一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>英<sup>えい</sup>吉<sup>きち</sup>利<sup>り</sup>運<sup>うん</sup>米<sup>まい</sup>  
 利<sup>り</sup>加<sup>か</sup>業<sup>ぎふ</sup>業<sup>ぎふ</sup>源<sup>げん</sup>生<sup>せい</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>パ<sup>パ</sup>レ<sup>レ</sup>ス<sup>ス</sup>メ<sup>メ</sup>キ<sup>キ</sup>シ<sup>シ</sup>コ<sup>コ</sup>と<sup>と</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>よ<sup>よ</sup>業<sup>ぎふ</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>社<sup>しゃ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>ら</sup>人<sup>にん</sup>数<sup>すう</sup>の<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>破<sup>は</sup>地<sup>ち</sup>の<sup>ら</sup>業<sup>ぎふ</sup>用<sup>よう</sup>知<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>

秘書<sup>ひしょ</sup>我<sup>わ</sup>の<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>車<sup>しや</sup>強<sup>ちゆう</sup>船<sup>せん</sup>業<sup>ぎふ</sup>て<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>行<sup>かう</sup>を<sup>し</sup>み<sup>ま</sup>あ<sup>の</sup>は<sup>の</sup>強<sup>ちゆう</sup>金<sup>きん</sup>使<sup>し</sup>  
 融<sup>ゆう</sup>金<sup>きん</sup>を<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>て</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>金<sup>きん</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>あ<sup>れ</sup>ど<sup>も</sup>  
 用<sup>よう</sup>意<sup>い</sup>の<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>と<sup>ら</sup>せ<sup>び</sup>つ<sup>て</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>金<sup>きん</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>あ<sup>れ</sup>ど<sup>も</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>社<sup>しゃ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>ら</sup>人<sup>にん</sup>数<sup>すう</sup>の<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>破<sup>は</sup>地<sup>ち</sup>の<sup>ら</sup>業<sup>ぎふ</sup>用<sup>よう</sup>知<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>  
 一<sup>いつ</sup>く<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>出<sup>で</sup>に<sup>に</sup>り<sup>り</sup>強<sup>ちゆう</sup>さ<sup>え</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>強<sup>ちゆう</sup>動<sup>どう</sup>ハ<sup>ハ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ト<sup>ト</sup>押<sup>お</sup>し<sup>て</sup>ま<sup>さ</sup>の<sup>ら</sup>も<sup>ら</sup>



まどろいふをゆめむく<sup>ゆめく</sup>でぬ<sup>ぬ</sup>辰目<sup>辰目</sup>がきれると十辰<sup>十辰</sup>めい  
 天<sup>あま</sup>河<sup>か</sup>屋<sup>や</sup>の肉<sup>うち</sup>の坊<sup>む</sup>ホリス<sup>ホリス</sup>う大<sup>おほ</sup>勢<sup>せ</sup>標<sup>ひょう</sup>の持<sup>もち</sup>と振<sup>あ</sup>て寄<sup>よ</sup>ま  
 く<sup>く</sup>義<sup>ぎ</sup>平<sup>へい</sup>う<sup>う</sup>ドル<sup>ドル</sup>策<sup>さく</sup>の上<sup>うへ</sup>で<sup>で</sup>級<sup>けい</sup>切<sup>き</sup>う<sup>う</sup>のせりふ<sup>せりふ</sup>中<sup>ちゆう</sup>島<sup>しま</sup>の<sup>の</sup>敵<sup>てき</sup>  
 う<sup>う</sup>飛<sup>ひ</sup>化<sup>け</sup>の<sup>の</sup>き<sup>き</sup>め<sup>め</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>文<sup>ぶん</sup>者<sup>しや</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>ひ<sup>ひ</sup>付<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>と  
 ふ<sup>ふ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ざん<sup>ざん</sup>切<sup>き</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>十<sup>じゅう</sup>辰<sup>しん</sup>目<sup>め</sup>が<sup>が</sup>石<sup>せき</sup>炭<sup>たん</sup>筋<sup>しん</sup>屋<sup>や</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>屋<sup>や</sup>  
 尾<sup>び</sup>よく<sup>よく</sup>本<sup>ほん</sup>堂<sup>どう</sup>と<sup>と</sup>遊<sup>あそ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>大<sup>おほ</sup>報<sup>ほう</sup>向<sup>こう</sup>江<sup>え</sup>原<sup>げん</sup>持<sup>もち</sup>さん<sup>さん</sup>あ  
 ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>以<sup>い</sup>報<sup>ほう</sup>向<sup>こう</sup>ま<sup>ま</sup>ど<sup>ど</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>で<sup>で</sup>み<sup>み</sup>り<sup>り</sup>外<sup>がい</sup>河<sup>か</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く

ちめる<sup>ちめる</sup>のも<sup>のも</sup>度<sup>ど</sup>が<sup>が</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>ると<sup>と</sup>ほ<sup>ほ</sup>め<sup>め</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>き<sup>き</sup>さん<sup>さん</sup>大<sup>おほ</sup>き<sup>き</sup>  
 お<sup>お</sup>山<sup>さん</sup>若<sup>じやく</sup>芳<sup>ほう</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>さ<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>〜<sup>〜</sup>ハ<sup>ハ</sup>イ<sup>イ</sup>〜<sup>〜</sup>明<sup>めい</sup>日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>江<sup>え</sup>  
 流<sup>りゅう</sup>法<sup>ぽう</sup>ハ<sup>ハ</sup>何<sup>なに</sup>時<sup>とき</sup>う<sup>う</sup>〜<sup>〜</sup>て<sup>て</sup>み<sup>み</sup>り<sup>り</sup>井<sup>い</sup> 末<sup>まつ</sup>夜<sup>や</sup>〜<sup>〜</sup>明<sup>めい</sup>日<sup>にち</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>あ</sup>産<sup>さん</sup>が<sup>が</sup>糖<sup>とう</sup>  
 烟<sup>えん</sup>成<sup>じやう</sup>仏<sup>ぶつ</sup>て<sup>て</sup>後<sup>ご</sup>堂<sup>どう</sup>が<sup>が</sup>累<sup>るい</sup>翁<sup>うわう</sup>院<sup>いん</sup>カ<sup>カ</sup>子<sup>し</sup> 昔<sup>むかし</sup>〜<sup>〜</sup>又<sup>また</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>つ<sup>つ</sup>う<sup>う</sup>  
 も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>、<sup>、</sup>そ<sup>そ</sup>ん<sup>ん</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>み<sup>み</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>〜<sup>〜</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>芝<sup>しば</sup>拵<sup>ぢゆう</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>巻<sup>まき</sup>江<sup>え</sup>延<sup>えん</sup>鳥<sup>てう</sup>  
 彌<sup>り</sup>寛<sup>くわん</sup>八<sup>はち</sup>百<sup>ひやく</sup>經<sup>きやう</sup>と<sup>と</sup>抱<sup>かか</sup>へ<sup>へ</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>て<sup>て</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>〜<sup>〜</sup>て<sup>て</sup>え<sup>え</sup>ふ<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>  
 万<sup>まん</sup>般<sup>ぱん</sup>位<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>江<sup>え</sup>染<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ぶ<sup>ぶ</sup> 一<sup>いち</sup>つ<sup>つ</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>芝<sup>しば</sup>拵<sup>ぢゆう</sup>と<sup>と</sup>た















三百二十本、その杭一、一寸とり程、鉄針と二本  
 渡して、風船の板根の上へ、鉄車をつけ、その  
 二筋の鉄針の、引くけて、風船が、車で、ソウ  
 イく、と、まゝ、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 入、用、で、ソ、イ、成、統、ま、さ、る、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 ト、や、ある、程、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 て、ソ、イ、切、り、て、落、る、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お

お、ど、お、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 ら、ぬ、り、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 どの、船、向、傳、信、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 ら、ぬ、り、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 風の、船、向、傳、信、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 俵、船、向、傳、信、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お  
 ある、通、り、お、船、向、傳、信、と、り、お、船、向、傳、信、と、り、ける、お、ど、お



どのやうなまのめいでもものねぬりさんどの  
 やうな軽くぬてきく物ものじやふ保てぬ鉄  
 針が切きとくと一着るおとまりの鉄針の報白  
 こそおぬのりぬやうふツツイとけぬきうり  
 こそその鉄針でつるまのていさふじやまが  
 ねむの武をさんのおふのぶ志をうー折角あま  
 てもけ連申のまらぬの「あせく」きよ「さ

れむサ 風船もどのやうな軽くても武をさんを尻が  
 重一守り希さんのおが重一「オットはまのこま  
 ふあま代りあまはのうらふのと紋布の軽いのぐ。  
 差引のい合せがつくづくふ「まごく」人お  
 もあまう重く「あせく」コレく「まごく」せ  
 の縁とらあやまるお疾中むごま禁れとらふ野後  
 ぶんが「まごく」もらひ「あせく」の目分らむむいといひあ



ぐう。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。つちのほろももの。  
 むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。  
 の玉川むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。  
 むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。  
 ふざげむづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。  
 して笑てむづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。  
 ふく風船とゆるふむづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。むづかきなまゐり。

が飛で仕舞ひ合ひのねまふ。ちやうつうり出あふと  
 の顔向と笑てうづこれ。は連中むうりて。  
 つ。今また出あてえま。うづこれ。まうりるとりふ  
 名顔向と。うづこれ。うづこれ。うづこれ。うづこれ。  
 サテその顔向と。うづこれ。うづこれ。うづこれ。うづこれ。  
 ちやあ。と借り切り。うづこれ。うづこれ。うづこれ。うづこれ。  
 まフテクと。建あ。うづこれ。うづこれ。うづこれ。うづこれ。





三思  
慘死



降仁自憐



罷任借居同音と大文字ふ出で金振へ規由出と  
 付て盡くその規由出ふは夜罷任借居同音與り  
 まる額定に今中學校さうんふ移りて初奉のも  
 のを日くふ同任ふまゝむもくとも親父株て小  
 學校ふ取り子供仲立てる習ふ出来ぬせめて  
 罷任の額定づけとめんめて我子ふ是んときり  
 取やうふまゝきりのめてそ為き役けくもふまゝ

む有志の仕方目く出席して罷任親理の同音志とぬ  
 ふだ〜○同音ふ取くも人より拜金と出させ務と  
 る人ふ考金と呈さる〜○互ふりひ法て痛果ざり時  
 へ社中の義身師裁定して務級と定む〜○義  
 身師の論ふ取ひ時へ社中より謝金と呈さる〜  
 一等の義身師痛く取くも時へ金十條二條三條の  
 義身師又案へ三條と定む○學問かゝるは方へ

開作自傳

開作自傳



万物の及程も知りぬりてゆく有は及及を以て  
 云ふも學問するいとぬあきけ方まゝの婦人  
 守お子供衆のつめふき扱けするすねぢちり束  
 塵むつゝまきり一切禁制只俗言とめて同善する  
 なり○席料の心細い身にて痛ふに務なされひ  
 えを貴金に持取りふおなりいト出て盡くと怨  
 たりと人情で何ふ痛むい播て十四もせしめやう

とおひよて習集して人う束外一日二三百人づも  
 来まばまうけまのと思ふてもまうとまううるまふ  
 身一借人の知識を増さするとりふのどからま  
 うけづゝふ拘まうむむ解い頼向てまうぬうある  
 程それら面ふうらふうううううううううううう  
 のむつゆりじや「それら皆は連中サ「イヤは連中  
 てら毎日謝金をとらまうづけでえらあも失ひさ



うまひ<sup>こと</sup>も<sup>志</sup>や<sup>志</sup>「イヤさうであいな<sup>志</sup>を<sup>志</sup>ぬ<sup>志</sup>り<sup>志</sup>あ<sup>志</sup>く<sup>志</sup>、  
 古<sup>こと</sup>の<sup>こと</sup>来<sup>き</sup>歴<sup>れき</sup>む<sup>む</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いち</sup>切<sup>き</sup>禁<sup>きん</sup>制<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>規<sup>き</sup>制<sup>せい</sup>で<sup>で</sup>学<sup>がく</sup>  
 ぶ<sup>ぶ</sup>ら<sup>ら</sup>よ<sup>よ</sup>せ<sup>せ</sup>つ<sup>つ</sup>け<sup>け</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>つ<sup>つ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>ど<sup>ど</sup>や<sup>や</sup>な<sup>な</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>や  
 「ある<sup>ある</sup>程<sup>ほど</sup>それ<sup>それ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>だ<sup>だ</sup>て<sup>て</sup>ん<sup>ん</sup>が<sup>が</sup>の<sup>の</sup>皮<sup>かわ</sup>で<sup>で</sup>やら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>り  
 と<sup>と</sup>手<sup>て</sup>輕<sup>かろ</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>淡<sup>たん</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>何<sup>なに</sup>でも<sup>でも</sup>や<sup>や</sup>つ  
 て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>舞<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>天<sup>てん</sup>物<sup>ぶつ</sup>連<sup>れん</sup>源<sup>げん</sup>い<sup>い</sup>思<sup>し</sup>念<sup>ねん</sup>分<sup>ぶん</sup>別<sup>べつ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ  
 本<sup>ほん</sup>教<sup>きょう</sup>寺<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>程<sup>ほど</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>建<sup>けん</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>別<sup>べつ</sup>ら

せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>倍<sup>ばい</sup>あ<sup>あ</sup>出<sup>で</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>で<sup>で</sup>も<sup>も</sup>倍<sup>ばい</sup>り<sup>り</sup>為<sup>な</sup>ひ<sup>ひ</sup>村<sup>むら</sup>田<sup>でん</sup>満<sup>まん</sup>る<sup>る</sup>さ  
 ん<sup>さん</sup>出<sup>で</sup>て<sup>て</sup>舞<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>連<sup>れん</sup>中<sup>ちゆう</sup>一<sup>いち</sup>日<sup>にち</sup>り<sup>り</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>て  
 い<sup>い</sup>よ<sup>よ</sup>く<sup>く</sup>舞<sup>ま</sup>建<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>日<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>舞<sup>ま</sup>み<sup>み</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>目<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>知<sup>ち</sup>子<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>  
 の<sup>の</sup>目<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>子<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>森<sup>もり</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>席<sup>せき</sup>人<sup>にん</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>  
 う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>同<sup>どう</sup>善<sup>ぜん</sup>ふ<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>く  
 委<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>祝<sup>しゆ</sup>賀<sup>が</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>つ<sup>つ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>で<sup>で</sup>先<sup>ま</sup>  
 づ<sup>づ</sup>う<sup>う</sup>口<sup>くち</sup>弁<sup>べん</sup>が<sup>が</sup>細<sup>こ</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>愛<sup>あい</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>聲<sup>こゑ</sup>し<sup>し</sup>よ<sup>よ</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>

開仁自傳下

二







ぐさ 吐免下さりませ 只今の先生は 羨望あふかい  
 ても 指を折せうごん 程の人でも あんでもおごり  
 ません 痛ひおちうしねぬもの 申おんごんりん  
 と 申て 痔師あふい まきんりつあ痛ひとくく多  
 人救の中へ 出ると 折く敷りまして 運送  
 井ハサテ 表着板親分の 通り 皆換がさふも 同言の  
 思るでお出さされま〜ぞりませうが 何う

には 吐きさうまごり 井んでい 同言も 出意いもので  
 りりまき 有糸口と 引出を 為まりり 出ま〜て ち  
 よつと 文明系化と 申さるの 構致と〜 井ふ  
 叔父の 女ふあま〜う 文へ 又福業 釜の 又〜うの  
 業の 申さ井り 同言を 海軍の 勢ひで お上げまを  
 海軍の 力と申 井るもの 申さう 申力のもの 申で 僅  
 一す 四方の 水も 熱して 漲りまき 申 時一ふ七

開仁自慢下

〇三十一



百倍ひやくばいふ強かう後ごぐりまゝごりままて目め方かた一いつ行ぎやうのりのりののと十七  
 丈ぢやうののききふふ押おしよよるるちちううううののああるるゆゆののでで煙えん八はち百  
 又また十じゅう四し年ねん西せい洋やうののモもリりンんジじととののううまま人ひと又また福ふく茶ちゃ茶ちゃぐぐの  
 ののああええままののととええままししてて始はじめめてて蒸じやう氣き船せんのの工く丈ぢやうととあ  
 とと出でててととややるるででおおささううりり弁べんととてて茶ちゃ釜かまとと文ぶん福ふくと  
 名なづづけけままししててるるのの湯ゆののああええししててききうううう出でままししててと  
 名な義ぎてて今いまもも茶ちゃ釜かまののああええままままままもも時ときののブぶクく

と中ちゆう弁べん明めいののああききうううう文ぶん字じよよのの日にち月げつとと並ならびびててううまま  
 ままをを錦にしんのの水みづ籠かごふふ日にち月げつののつつららてておおささううりり弁べんのの判はん  
 以も政せい乃のののああききううううああるるああ世せい俗ぞくのの積つみふふはは一いつ摺すりのの白しろ  
 いい思しいいととかかけけててめめいいううわわららぶぶががききううぬぬああららうう中ちゆう弁べん  
 るるののああららううふふおお茶ちゃととてててて費ひひひとといいととめめううままをを  
 ああららうう月げつのの中ちゆうのの危きのの白しろいいののとと日にちのの中ちゆうのの為ためにに思しい  
 ののとと中ちゆうままししててるるののででみみりり弁べんをを味あじ危きががまま



つう海内をまわしてふちぶりのさうさためとやを  
 のが直順に経つとゆう一井るがあまの俗人の  
 ね遠ひはゆゑきんみゆゑぬ人のゆとあち又音  
 とやうとんとおせぬるとさうくくううぬとや  
 まを救世の中ふの浜山さうぬ人ぬあるゆので。  
 甚うさきう海りみつけて大坂中の豆腐屋へ  
 金とて豆腐のうき銭買集め横堀の苑とひ

うけるとやゆ希たまうむ他痛で言産とおろさ  
 れるゆゑきんしうけ出して聖良者の社とひき  
 それを人中でいもねてか目録でまうせる聖良  
 者さうさきんさうとさうはつゆりぞいさて  
 横堀の苑とひまとや豆腐グイとまもる又その  
 苑とひひうけると又いもるまもるまうけると  
 夜にや豆腐をれぬてかとりまてグイとまもる







のと大さうふれを中して文福茶釜の積敷う茶  
 釜ははせり今橋り彩町の乃々布一りてちや  
 色立流茶相の策一入りて居て極めの付て居る  
 のが正れ式茶じや鶴の池のおろこ湯と採り  
 ら捨ふても事らるるまじと危とい何じや海はふ  
 おくまじさうさだんさうさき守師じや三茶は茶  
 まり合ひがあい第一等の茶守師ふはふ回るる

志こい表板の親名の通り十支の金を色でこ  
 出て来いサアよくぬぬうとぬぬ也を同つき務  
 ら十支負さう務づくとつふ勢ひふむうふむの  
 同に連中もさう務まきみさうく互ふ同と目と目合  
 せて居りさう大勢の人中ぬぬも連中の外は  
 務ふ知りさうい後安記みも抱さるるさうんども  
 さらつとやりさめぬハト後と居て出うけるい名さ

四七 四八

二二



神嘗又とふぐ十支せしめらるるよらるる  
神ふゆづりてまら筆ととむ

園に自傳初編下早

明治七年三月官許  
同 六月發行

大阪東大組第廿一區  
南久太郎町三丁目

著述并蔵版 山口又市郎



